

陰翳礼讃

谷崎潤一郎

この本をはじめて読んだのは、まだ学生の頃でした。その頃の印象として、「まあ、なんと綺羅綺羅した話だろう」と思ったことを覚えています。光輝くキラキラではなく、暗がりであろうそくなどの灯りに映えてぼんやりと輝くかんじが、「綺羅綺羅」と感じたのだと思います。それ以来、谷崎潤一郎の本は、どれを読んでも「綺羅綺羅」という印象がついてまわっています。そのかがやきの説明で一番印象に残っているのが、老舗の料亭での食事の場面です。現代であれば、「そんな暗い部屋で！」「電気くらいつけなさい」と言われるほどの薄暗がりです。ろうそくの灯りをたよりに食事をいただく場面。その時の食器、漆塗りの汁椀の説明が出てくるのですが、たよりない灯りで照らし出された時の状態、薄明かりが映えて一番美しい状態を計算して作られたものだということを知りました。ほかに面白く感じたのは、羊羹の説明。「羊羹の色は瞑想的だ」ということから始まり、「その肌は夢見る如きほの明るさをふくんている」「そして、「そう旨くはない羊羹でも、味に異様な深みが添わるように思つ」という、まさに力説。それを読んだ後で羊羹を食べる時に、上から、横から、まじまじとその羊羹を眺めてしまいました。ぴかぴかに磨き上げられたものには感じられない、ちょっとくすんだところに「なにか」「ありそう。そう言えば昔、祖父母の家の納戸にはなにかいそうで、怖かったことを思い出しました。」 Y・M



中公文庫

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞